五感で感じる

木の介護力

木造建築で笑顔がふえた

Hearing

Sight

Touch

Flavour

Smell

木造建築
SPF
DRY

笑い声がやわらかい風にのって、館内が癒しに満ちていく

丘陵地にふっと現れる。ただよう品のよさにだれもが目を奪われてしまう。
南フランスのリゾートホテルを思わせる佇い。
2006年に明治清流苑が開所したとき、
通りかかった人々の多くはこの建物が特養ホームとは想像できませんでした。
風車のように十字の形をした全景、アーチ型をあしらったバルコニー、
真ん中に丸窓をあしらったセンターホール。
木造建築ならではの“あたたかみ”が外観からもにじみ出ているかのようです。
玄関から中に入ってみる。和洋折衷の内装に落ち着いたインテリア。
光と影のコントラストによる安心感。そして、どこにいても吹き抜けていくここちよい自然の風。
屋内には外観の印象をさらに超える、自然素材がもたらす癒しの住環境が整えられていました。
従来の養護施設のイメージを大きく覆した明治清流苑。
そこで生活する方々、働く人々が五感で受けとめている幸福感を探ってみます。

高台の斜面に立地しているので、エントランスから地下に当たるフロア（この階層はRC構造）にも自然光がたっぷりと射す。

地下1階にある“歩行浴温泉”。1周22メートル。リハビリの際は歩行に抵抗をつける目的で、流れるプールのような水流を装置で出すこともできる。他の施設から見学に来た人たちの注目度も高い。

■Tさん（ご主人が2008年から入居）

うれしそうな表情をするようになったんですよ。

「木造っていうのは、家（自宅）からつながってる感じで、真っ先に『いいな!』と思ったんです。」

二つ年上のご主人が病に倒れたのは2005年。Tさんはそれ以来、病院〜リハビリ病院〜老人保健施設と施設を移り変わりながら介護を続けてきました。「歩けない、しゃべれない状態に突然なってしまい、ここに入居するまでの数年の急展開は、今ではもうよく思い出せないんです。そのくらい辛くて大変だったんです。」

2008年になり特養施設をさがしている中、Tさんが明治清流苑にピンときたのには根拠がありました。Tさんご夫妻は山登りが趣味。それもハイキングのレベルではなく、アルプスの北岳も制したこともある本格的なアルピニストだったのです。自然の癒しの力の大きさを人並み以上に体験し愛してきたTさんにとって、日本最大級の木造による特養施設が自宅から遠くないところに建てられたことは、大きなインパクトがありました。

「ここしかない！ と家族で一大決心して、申し込みから半年待って入居することができました。木造ならではのこの建物の特徴については施設長さんから話を聞いていましたが、実際に過ごしてみると何と言うか本当に安心できるんですね、主人も私も。主人の気持ちは顔の表情から読み取るしかないのですが、ここへ入ってからは以前に比べて明らかに精神的に穏やかになりましたね。無表情だったのが回復してきて、うれしい表情さえするようになったんです。主人が職員の方々に心を開いて、安心して身をゆだねていることがよくわかります。私は土・日と祭日、娘が水曜の夜に会いに来ているのですが、今では主人は私たちが来たことよりも、差し入れ物が入ったスーパーの袋の方が先に気になるみたいですから（笑）。」

「あと、ここでよかったと思うのは、いわゆる“施設のニオイ”がまったくしないことですね。きっと建物全体の風通しがいいせいでしょう。外から会いに来る家族にとって“施設のニオイ”というのは、無意識のうちに気が重くなる要因のひとつですから。それから外観がおしゃれなのはやっぱり女性としては理屈ぬきにうれしいですね。…こうして考えてみると、介護する側の私たちにとってもこの家はやさしいんですね。」

入居されて2年。奥様も心の余裕を取り戻すことができ、もう一つの趣味、若い頃から続けてきたバレーボールを再びはじめられたといいます。お盆、暮れ・正月、連休などはご主人を自宅に連れて帰ります。

「明治清流苑さんにお世話になってからは、家に連れて帰っても『戻りたくない』なんて言い出すことはありませんよ。主人はもともと予定をしっかりと立ててその通りに行動するタイプの人ですが、カレンダーにしるしを付けたここに戻ってくる日になると、やっぱりしゃんとしてむしろよろこんで帰っていくんですよ。」

玄関から入ってすぐのロビー。自然光が抑えられ、間接照明が珪藻土（けいそうど）の壁や煉瓦、無垢材のインテリアの質感を浮かび上がらせて、ゴージャスな雰囲気。

十字の建物は車いすで生活する入居者にとっても“楽しい回廊”になっている。ところどころにくつろげる共用スペースがあり、窓の外の景色の変化を楽しむことができる。

■Kさん 94歳

ヒザの水をまだ一度も取っとらんの。

以前にいた施設でのこと。履いていたスリッパを車輪に引っ掛けてしまい、車いすごとひっくり返るというこわい経験をしてしまったKさん。幸い大事にはいたりませんでしたが、先の生活に不安をかかえる精神状態になってしまったのは無理もありません。それから少したって、Kさんはショートステイでここ明治清流苑を利用する機会を得たのです。これがきっかけとなり、希望が開けました。Kさんは明治清流苑をたいへん気に入り、2010年の1月より晴れて入居となりました。94歳というご高齢でありながら、Kさんは以前の鉄筋コンクリートの施設と比較して、木造建築のここちよさをしっかりとからだ全体で受けとめていらっしゃいます。

「ここへ初めて来た頃は歩行器を使っておったが、玄関に入ったとたんに床がやわらかくて歩きよかったんや。何かちがう、やっぱ板の間やなあ!って。今日は車いすやけど、車いすでも動きごごちがいいん。

そう、車いすでもな。いや、わかるんよ、何かちがう。ここは建物が十字のカタチをしておるけど、木のベランダでぐるっと一回りできるからええ。ぐるっと回って景色がいろいろ変わるのを見るのが楽しくてな。ここへ来てから半年やけど、ヒザの水をまだ一度も取っとらんの。おかげで気持ちも明るくなったヨ!」

入居者の皆さんの中でもひときわ楽しそうなオーラを発しているKさん。目下の趣味はカラオケにトランプにテレビと、声高く笑いながらおしえてくださいました。

■Iさん 86歳

もう痛くない。帰りたくないよ、ここがいい。

もうすぐ86歳のお誕生日を迎えられるIさん。数年前から足腰を弱くされ、いくつかの施設でデイケアやショートステイを断続的に利用してきました。明治清流苑には以前に3回ショートステイで訪れていて、そのときのいごこちのよさが忘れられず、3度めのショートステイから帰った3ケ月後に正式に入居することにしました。

「ここが気に入ったわけはいろいろあるけど、やっぱり1度目に来たときの最初の食べ物がおいしかったからだね(笑)。それに係の人もみんな優しくてすぐ来てくれるし、部屋は広いしトイレも使いやすいし、何よりまわりを畑や自然に囲まれていて気持ちいいしね。でも以前は集合部屋にいたでしょ、わたしはみんなと集まって楽しく笑うのが好きだから、個室になった今はちょっとさみしいかな。でも午前中に他の場所(ユニット)の人たちと一緒に過ごす時間があるから、そこで友だちをつくってるのね。」

編み物が趣味というIさん。終始おだやかな物腰でお話くださっていましたが、さりげなく重大な事実を伝えてくれました。

「実はここへ入居してから、立てるようになってね! 歩行器を使って。以前は具合がよくなったためしなんてなかったから、今とても希望をもててます。もう痛くないの!

建物が木に変わっただけでこんなにちがってねぇ。他のどこにも帰りたくないよ、ここがいい(笑)。だって旅館みたいだしね。ここに来てる別な人なんて、係の人のことを“仲居さん”って呼んでるんだよ(笑)。」

南向きで明るくて開放的、それでいて直射日光が当たらないウッドデッキは、皆さんも大好きななごみのスペース。建物全体として、光の明・暗のコントラストにメリハリをつけるよう意識した設計がなされている。

COLUMN 『福祉は住まい。住まいは人権』…冒険した甲斐がありました。

社会福祉法人 永生会 総合ケアセンター清流苑
理事長 総合施設長 児玉 貞夫さん

およそ老人ホームらしくない。そういう施設をずっと作りたいと思ってたんですよ。高級リゾートホテルか?おしゃれなブライダル施設か?…見まちがえてしまうと言われるのはうれしいですね。日本のこの規模の福祉施設では他に例のないツーバイフォー工法の採用。いわば明治清流苑は“革新的な木の家”と言えるわけですが、その設計上の基本テーマは“大正ロマン”なんです。和洋折衷の“人間的なあたたかみのある空間”をカタチにできて満足しています。

私は北欧を中心に海外の施設を視察してきました。北欧には『福祉は住まい。住まいは人権』という思想があると聞きましたが、住まいに対してのこだわりをいろいろな場面で深く感じ取ることができました。高齢者と住まいの問題は様々な試行錯誤を経て老人ホームにも大きな影響を与えているようで、高齢者が永年暮らしてきた環境の延長線上に老人ホームも位置づけられ、住空間は日本に比べて格段に広く、設備やインテリアも豊かでまさに“住まい”に対する基本的な考え方のちがいを実感しました。建物はシンプルでしたが、木造の良さを生かした施設より住宅という感じで、この作りを日本でも取り入れられたらと思いました。

諸外国に対し日本のホームは“療養施設=病院”というモデルで建てられてきたと思います。居室は鉄筋コンクリートの硬さと冷たさが当り前の世界。私が木造のホームを推奨するのは高齢者のためだけではありません。そこで働く職員の健康面、心理面に与える優れた性能があるからです。さらに家族の皆さんが、誇りをもって訪れていただけることは、これまでのホームでは考えられない情景でした。『本当にこのホームでうちの人を見送ることができてよかった』と語っていただき、私たちはこのホームを建てたことが間違いでなかったと確信できました。

日本で諸外国と同じような木造の特養施設の建築が可能になった出発点は、2004年、ツーバイフォー工法にようやく耐火構造の国土交通大臣認定**(※参照)**が下りたことですが、そこから先にもハードルはいくつもありました。主なところは…

(1) 木造建築のオーソリティで、かつ介護の仕事に精通している設計士、技術者がいるか?
(2) 建物として行政の許可を取るのに手間取らないか?
(3) 前例がないゆえにコストが割高になってしまうのではないか?
(4) 経年劣化に対しどんなメンテナンスが必要になってくるか?
ということです。

(1)については、全体のプロデュースと設計を、同じ大分が地元の設計士さんにお願いすることで万全の体制がとれましたが、構造計算をできる人材が見つからず、実は一時は中断しかけたのです。ツーバイフォーの構造計算ソフトさえないという日本の現状…。設計はしたものの建築確認がとれません。困っていた中、ようやく大型木造の構造計算のできる方を見つけ「なんとかなる!」ところまで漕ぎ着けました。上がってきた構造計算資料は従来のRC工法のそれと比べ、3倍のボリュームでしたね。

(2)に関しても未知数で心配でした。ところが、当施設は補助金が入っていない行政のしばりを受けない条件のせいか、時間的制約を受けずに進み、思ったより早く建築許可が下りました。構想・設計からおよそ1年半後、GOサインが出ました。

(3)も危惧するところでしたが、結果的にRC工法に比べ2割ほど建築コストを抑えられた計算となりました。

(4)については今後の課題で見守っていきます。開所してまる4年をむかえ、ベランダの木の腐蝕止め塗装を一度やったところですが、その他に目立った不具合は今のところありません。

とにかくすべてが冒険でした(笑)。今後このような入居者にも職員にもやさしい木造の福祉施設が全国に増えることを願い、お伝えしたいことは、木造ツーバイフォーは柱や梁がない代わりに、構造上部屋のスパンが限られてきます。検討する際には、

●全体の設計コンセプトとユニットケア体制に緻密な計画を立てておくこと
●部屋計画をしっかり練り込んでおくこと

この2つが大切だと痛感します。そして何より『施主、設計者、施工者の介護への思いが一致すること』が大前提なのは言うまでもありません。

(※参照)カナダ林産業審議会(COFI)と日本ツーバイフォー建築協会の協同により、ツーバイフォー工法の主要構造部すべてにおいて、耐火構造としての国土交通省大臣認定を2004年4月に修得。木材を強化せっこうボードやアルミニウム箔で耐火被覆することにより、木造建築物が耐火構造として日本で初めて認められた画期的な基準です。これにより、木造ツーバイフォー建築物に対する階数や面積並びに用途上の規制が大幅に緩和され、防火地域でのツーバイフォー住宅(100㎡超)や4階建ての共同住宅、さらには商業施設、ホテル等の建設が可能になりました。

COLUMN

心と五感にはたらきかけてくる不思議な力。辞めるスタッフもいなくなりました。

社会福祉法人 永生会 明治清流苑 施設長 児玉 末美さん

風車の羽根のような十字型の建物は、全体に風通しをよくして、4つに区分したどのユニットにも日が射すよう配慮したユニークな設計で、一カ所から各ユニットに目を届かせやすいという利点もあります。設計段階での想定以上に明るく風通しがよく、エアコンに頼らずに夏は涼しく、冬は暖かさが持続する空間が実現しました。さらに時間がたつにつれ、入居されている方とスタッフの内面に、数値に表せないうれしい変化が見えてきたのです。

ある認知症の方。別棟の施設でお世話をさせていただいてきましたが、断続的にあげる奇声が止まず、ご家族も担当の職員もかなり疲労困憊していました。別棟はRCの建物です。こちらでユニットケアをはじめるに際して、その認知症の方に居室を移っていただいたのです。住空間は変わりましたが担当のスタッフも対応も変わりません。ところが少しして予想外の展開になりました。…奇声がほとんど止まったのです。それまでどんな対応をしても変わらなかったのに、これには驚きました。明らかに精神的に落ち着かれたということですね。職員もノイローゼ寸前のところで救われました。私が推測するに、きっと木造の音の響き方のちがいによる効果ではないでしょうか。木造は音がキンキンと響くことがなく、ふだんから何となくリラックスした雰囲気が漂います。人がたてる音だけでなく、雨の音、風の音、鳥や虫の声、ここではみんな穏やかに伝わってきます。

ただ、ツーバイフォーは横方向の音や振動は完全にシャットアウトしますが、上の階の振動は若干ですが聞こえてきます。それが気になる方がいないか、私も当初は心配で皆さんに聞いて回りました。すると“音は聞こえることもあるけど、家にいたら自然に聞こえてくる音だから気にならないよ”と好意的な意見ばかり。安心しました。

音のちがいは職員たちの動きにさらに変化をもたらしました。鉄筋の建物ではみんなナースシューズを履き、パタパタと慌ただしく動き回ってきました。シューズを履いているのは、カタい床からの衝撃を柔らげるのと、たとえばベッドのキャスターのストッパーの上げ下げとか足を保護する必要がある動作のためです。仕事がデキる人ほど慌ただしい動きをしているものです。ところが木造のこの施設では、床が柔らかく音も静かなせいで、職員みんなの動作がおだやかに、細やかになるという現象を生んでいます。せわしくなくなった結果、足の動作もゆっくり確実となり、家庭用のスリッパで十分仕事ができるようになりました。夏などはスリッパも脱いでハダシになっているスタッフもいるくらいです（笑）。利用者の方々からは“職員さんがキツい顔をして急いで通り過ぎることがなくなって話しかけやすくなったよ”との反応が。職員の動きと内面的な変化を、利用者はちゃんと感じ取っているのですね。

ユニットケアのいいところは“生活感”があることです。足下ひとつ変えたことで利用者に施設にいる思いを軽減できたのです。ならばもっと自宅のように思ってもらおうと、職員によるマナー委員会で話し合い、『ケアワーカーも看護師も私服のまま仕事してOK』と規則を変えてみました。この試みも思った以上に効果を上げています。“あんたの今日の服の色、いいねェ”…服装の話題がコミュニケーションをとるキッカケになっているのです。若いケアワーカーと歳の離れた高齢者とではなかなか共通の話題がないものですが、服の色やかたち、食べ物の話ならお互いに自然とできますから。

木造による物理的な環境の変化は、精神面・心理面にも連鎖して、入居者と職員の両方に数々のプラスの効果をもたらしているのです。実はこの数年、辞めていくスタッフがいなくなりました。これも木造が人におよぼす何かいい力がある実証かもしれませんね。

■安東 斉和さん（ケアスタッフ）

地震速報？ えっ本当？

「僕の実家はいわゆる“ 建て具屋 ”なんです。ですから子どもの頃から木造の建築現場とかよく見てました。2005年の11月からこの建物の工事がはじまったのですが、僕も仕事の傍ら気になって、まだ建材むき出しのフレーミングの段階から建築中のようすを垣間見てきました。自分にとっては目になじんだ光景というか、ふつうの家みたいな感じで、施設を建ててるとは思えませんでしたね。僕個人としても木造が好きですし、相談員として自信をもってご家族の方にこの施設の物理的なメリットと、感覚的なここちよさを説明しています。」

明治清流苑に配属になる前に、同グループの他の施設で約10年仕事をされてきた安東さん。初めてツーバイフォーで建てられたこの“ 家 ”がもつ特性を、ケアのプロの立場から冷静に捉えています。

「まず誰もが感じるように床が柔かいんですね。働く健常者の立場としても足腰は確かに疲れにくくなりましたよ。あと、強い風雨の時に耳がツ〜ンとならないんです。日常周囲にある音の響き方、伝わり方が鉄筋とはちがう。なんと言うか、音が丸いんです。さらに大きな要素として、想像してた以上に頑丈であること。たとえば地震が起きると、今ではすぐ速報が入ってきますよね。すると伝えられた震度ほどみんなほとんど揺れを感じてないんです。耐震性・耐久性の高さはツーバイフォーの特徴の一つだけれど、実際の揺れでその効果を実感できて何とも頼もしい感じですね。」

しかし、木造ゆえに手間がかかる一面があることを安東さんはしっかり指摘されます。「床がキズつきやすいので、イスや什器の移動は気を付けなければいけませんね。特につい引きずってしまうイスかな。あと軸組の在来工法といっしょで、寸法に若干の遊びがありますね。開所してそろそろ4年ですが、開きにくいドアとかでてきていて、すでに手直ししたりしています。まあ、どの手間も木造の家と共存していくためには常識の範囲ですけどね。これから年月が経って、全体的にどういう変化が起こって、それに対してどんなメンテナンスが必要になってくるか、注意していかなければいけませんね。」

日本は木の国でむかしから馴染みがあるのだから、いずれ木にもどるはず、と安東さん。介護のプロと建て具屋さんのご子息という両方の厳しい目をもって、これからも評価とご指摘をお願いします。

1ユニットは利用者10名、スタッフ5名という配置。

個室に床続きで併設されたトイレ。 襖風の折れ戸で開け閉めする。 この、トイレがすぐ横にあることを感じさせない仕切りの工夫、 介護する人の動作を考えたスペースの確保、トイレの角度など、 研究に研究を重ねた設計。

社会福祉法人 永生会 明治清流苑　DATA

- 特別養護老人ホーム（定員47名）、ショートステイ（定員13名）、デイサービスセンター、介護予防センター

- 建築場所／大分県大分市大字猪野729番地1
- 敷地面積／6931.84m²（2096.88坪）
- 建築面積／2039.03m²
- 延床面積／4469.23m²
  （1階／2003.04m²、2階／1798.33m²、地階／667.83m²）
- 構造／1・2階/枠組壁工法（木造耐火構造）、地階／RC造

- 設計監理／（有）吉高綜合設計コンサルタント
- 施工会社／安藤建設（株）
- 設計期間／2004年12月〜2005年11月
- 施工期間／2005年11月〜2006年6月

周囲になじむ静かな佇まいの中には、安らぎがありました

愛知県豊橋市の郊外。地元の人たちの憩いの場所である総合公園の近く、のどかな風景が広がる中に、フラワーサーチは静かに佇んでいます。広大な敷地を活かした平屋のその建物は、周囲を見おろす威圧感をもたず、ごく自然にそこの空気感の中になじんでいます。ゆとりあるスペースに整然とレイアウトされた間取りをもつ建物内が、整然としながらもそれが冷たさにつながっていないのは、見通しの良さ、中庭を囲む回廊、窓を大きく取り光差し込む居室、どこからも目に入る緑……といった人が安らげる要因に満ちているからでしょうか。フラワーサーチから聞こえてくる声に耳を傾けてみましょう。

■山本 幸恵さん
（グループホーム マネージャー）

圧迫感がなく、心身とも快適で清々しく仕事ができます。

山本さんは、2005年の開所からフラワーサーチの建物が、まだプレハブだった頃から建っていく姿をずっと見てきたと言います。

「木の骨組みの段階から見ていて、こんなに大きいのに木造なんだと、そこでまず感動というか、すごいなと思いました。私はここに来る前には大きい施設にいたんですけど、そこはコンクリートなもので冷たい感じでした。実際、こちらの建物ができて中に入った時に、広いフロアでも、柱はあるんですけど、そんなに苦ではないんですよね。大きい施設だとドーンと真ん中に柱があって、見渡すのも見渡しにくいということがよくありますけど、そういうのがないです。ありがちな言葉ですけど、建物自体にあたたかみがあるなと思いました。天井までの高さもあるので、圧迫感がなく、心身ともども快適で清々しい気持ちで仕事をさせてもらっています。」

お話をうかがっている中で、“ あたたかみ ”という言葉が山本さんの口から何度も聞かれました。

「以前に勤めていた建物は、蛍光灯で病院みたいな雰囲気があったんですけど、ここは間接照明を多く取り入れているものですから、照明もあたたかみがありますね。住宅みたいな感じ。天窓もあって自然な灯りが入ってくるので、お客様からやさしい感じだねと言われます。」

実務のしやすさという面では、お客様に目を配りやすい点を挙げています。

「お台所やスタッフルームから、両フロアを一望できるものですから、私たちがそこで何かやりながらでも、お客様に目が届きますし、お客様も居室から一歩出ると、みなさんが過ごされるフロアなものですから、寂しくないと思います。他のいろんな施設に伺っても、みなさんの集まるところは、お部屋から長い廊下を歩いてやっと共同スペースというところが多いんですよね。そうなると、お部屋で何かあっても私たちが気付きにくいですし。」

ご家族からは“ 臭いがない ”という話をよく聞くと言います。

「施設独特の臭いがないと。前の施設では、臭いをなくす専用の装置が入っていたにも関わらず、独特な臭いがあったんですけど、こちらは開所して5年も経っていますけど、そういう臭いはないですね。外見もペンションに住んでいるみたいだとおっしゃる方もいて、私たちも掃除が楽しいですね。きれいだからずっときれいにしておきたいとも思います。」

4月に開所した 「ラヴィアン」は、中庭を回廊が取り巻く作り。光が満ち、シックで清潔な館内は、 訪れた方がホテルと勘違いしても無理はない。

スタッフの明るさもこの建物に一因があると思わせるほど。

「2階3階からの空の風景もいいと思うんですけど、ここはすぐに草木が見られて心が和む気がします。ドアを開けて一歩外に出ると土があるというのは、すごく安心感がありますね。」と土本さん。

■土本 満理子さん
（有料老人ホーム ラヴィアン マネージャー）

「ふるさとに帰った香りがする」と言われたことがあります。

2006年からフラワーサーチに勤める土本さんは、看護師の資格をもつ、ショートステイ部門の業務上はもちろん、精神的な支柱でもあります。長い病院勤めから、フラワーサーチに移ってきて、土本さんは、まずこう感じたと言います。

「鉄筋コンクリート造りの病院でずっと働いていましたので、こちらに来たとき、不思議な空間ですごく気分がよかったというのが第一印象なんです。柔らかい感じで、いい建物だなというところから私はスタートしています。」

印象としての良さをすぐに感じた土本さんは、働くうちに、実務的なメリットも発見できたようです。

「建物の構造が、お客様を一面に見られるようになっているので、お客様の安全を守りやすいんです。他の施設を見学したとき、スペースの中に死角があって、あそこだとお客様が転倒しても見えないなとか、そういうところをたくさん見てきていたので、ここに戻ってくると、やっぱりうちがいいなと本当にそう思いますね。」

建物としての良さは、土本さんご自身だけでなく、お客様やそのご家族も感じているとのこと。実際に、こんな声を聞いたと土本さんは教えてくれました。

「認知症のあるお客様とそのご家族が見えたとき、ほとんどの方から“ ここはホテル？ ”という言葉が聞かれます。ケアマネジャーの方も“ ここは施設臭がしない ”と言ってくれます。それから、“ ふるさとに帰った香りがする ”と言っていただいたこともあります。どこのショートステイも使うのがイヤで、でもここだったらどうだろうと見えた方が、うちのショートステイに入られるとすぐにそうおっしゃったんですよ。私も社長にもよく

COLUMN お客様目線で考えると、木造平屋しか選択肢はありませんでした。

有限会社スピリットネイチャー　代表取締役　元吉 伸幸さん

フラワーサーチの建物を建てるとき、次のようなことを考えました。お客様が要介護状態である高齢者様なので、ひとつは、地に足のついた生活をしていただける建物であること。そして、建てる地域も、このような田舎でありますので、そこの風土や風景に合った形であること。自分の思い描く建物やフラワーサーチのあり方を、抽象的にですが、私はこういう形の生きがいを望めるような高齢者様のホームにしたいんだと設計会社さんにお伝えしたんです。そのうえでアドバイスをいただいたところ、コストパフォーマンスもございますし、木造で、せっかくなら平屋で作ってということになりました。平屋が一番適した形だったんですね。

今年の4月に開所したラヴィアンという有料老人ホームも、これはもう平屋でやるべきだと決めていました。フラワーサーチを開設して5年間の私どもの経験の中で、あらためてお客様目線から何が今必要であるかと考えたとき、医療依存度の高い要介護高齢者の方々が、生きがいを持って住むことができるホームを作りたかったんです。お散歩に行かれたりとか、日々自然と触れ合うような環境となりますと、どうしても木造平屋でしか考えようがないなと。

できた建物には、やはり木造ならではの良さがありますね。ツーバイフォーで作れたので、非常に温かみがある。あとは思った以上に気密性が高いですね。

お客様の状況が、有事のときでも判断しやすかった。お客様が、お部屋でもし転倒されても、物音ひとつでどういう状況かスタッフ自身が判断できるというところは、ツーバイフォー工法のメリットだと考えてます。それと、広々とした空間。広い空間というのは、あくまでもお客様目線で考えますと、ゆとりある生活につながるんです。こういう広い空間で仕事をさせていただくことは、スタッフにとっても心にゆとりがもてると思います。

言うんですけど、本当にここは不思議ですよねと。あとは、壁と床が柔らかいから、倒れてもそうひどいことにはならないねとおっしゃるご家族の方もいらっしゃいます。確かに、大きく倒れても大事故にはなったことはないです。」

そして、お客様の安全を守るには最高、と土本さんが特に評価するのは、平屋造りであること。

「2階や3階の建物になりますと、階段で足を上げることでの転倒もありますし、お客様が私たちの視界から見えなくなるわけです。ここでは、そういうことは絶対にありません。ほとんどのお客様がどこで何をしているか確認できるので、私たちからすると働きやすい職場ですし、お客様からすると生活しやすい場所になっていると思います。」

ラウンドした食堂は、まるでオーベルジュ。空間も食事のおいしさを引き立てる。広さの割に室内の柱は気にならない作りになっているので、スタッフが入居者の方をつねに視認できる。

■Aさん

おっかさんは安心しているんじゃないかな。3日と空けずに来ますから。

今年の4月に入所したばかりのAさんは、長く国産材を使った木造家屋にお住まいだったため、まだ外材の建物の住み心地には慣れていないとおっしゃりながら「鉄筋のような冷たさは感じません」と木造ならではの温かみは実感されている様子。「おっかさん」と呼ぶ奥様もよく面会に来てくれるとうれしそう。

「おっかさんは、よく来てくれて掃除をしてくれます。実際に口にはしないけど、きれいなところだとは思っているでしょうね。私がごはんを食べているとき、一緒に食べるかと聞くと、恥ずかしいせいか断るけど、私が体操をやっているときは、一緒にやるかと言わんでも、後ろで体操の真似事みたいのをやっているわね。こういう施設に私が入って安心しているという気持ちはもっとりますよ。3日空けずに来ますからね。だいたい、朝9時頃来て、お昼前に帰って行くくらいです。お友だちがついてきて、私の部屋に3人でいることもあるんですけど、結構、広くていい感じをもっているんじゃないですか」。

ご本人はもちろん、ご家族に安心して満足いただけることも施設の大切な要素。Aさんのところは、まったく心配ないようです。

老人介護福祉施設 フラワーサーチ／フラワーサーチラヴィアン　DATA

- フラワーサーチ／グループホーム（定員18名）、ショートステイ（定員20名）、デイサービス（定員30名）
  ラヴィアン／有料老人ホーム（定員30名）
- 建築場所／愛知県豊橋市東高田町670　■敷地面積／5,633m²
- 建築面積／2,811.91m²（フラワーサーチ／1,555.21m²、ラヴィアン／1,256.70m²）
- 延床面積／2,776.70m²（フラワーサーチ／1,499.73m²、
  ラヴィアン／1,231.08m²、渡廊下など／44.89m²）
- 構造／平屋建て枠組壁工法（木造準耐火構造）（両施設とも）
- 設計監理／（株）ニコム
- 施工会社／（株）東海ビルド（フラワーサーチ）、
  （株）杉本組（ラヴィアン）
- 設計期間／2004年5月～2004年7月（フラワーサーチ）、
  2009年6月～2009年8月（ラヴィアン）
- 施工期間／2004年9月～2005年1月（フラワーサーチ）、
  2009年10月～2010年2月（ラヴィアン）

高級住宅街に溶け込む調和性に、豊かさが息づいている

海風をかすかに感じる高級住宅街の中を歩くと、
雑木林が目に入ると同時に見えてくるのがグランダ鵠沼松が岡です。
周りの邸宅と比べても高級感を漂わせながら、かといって決して威圧的でもなく、
突出した違和感も醸し出さない調和性は知識人の別荘を彷彿とさせます。
一歩中に入れば、まず足が違いを感じます。木造ならではの床の優しげな感触。
そして、生け花やネームプレートなど、そこかしこに「和」のイメージが活かされ、
その統一感が落ち着きを生んでいます。
開設後1年。四季の移ろいを一巡りしたグランダ鵠沼松が岡の働き心地を聞いてみましょう。

■永原 めぐみさん（ホーム長）

木造には季節の生花が似合うんです。

「施設の善し悪しは入ったときの空気でわかるんです。」と永原さんは言う。

「自分がどこかの施設に行ったときに、空気があんまりよくないと思うことがあるんですけど、そういうふうにはしたくないですね。」

永原さんのそんな思いは、確実に育まれています。グランダ鵠沼松が岡の魅力は、その建物がひとつの要因になっていることは間違いないところですが、それとともに忘れてならないのは、ホーム長である永原さんのお人柄。ほがらかで人懐っこい永原さんの存在は、もともと光が満ちているホームに、さらに明るさをもたらし、“いい空気”を作り出しています。

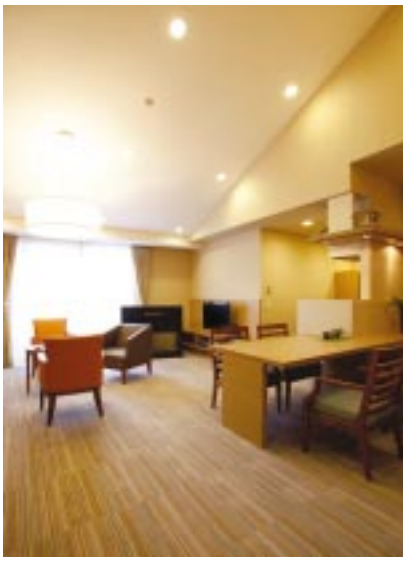
「今までにいたホームは鉄筋だったのですが、ここは木造で空間としてゆったりしていると思いますね。天井も吹き抜けになっているので、その部分で広い空間が保てているのかなと思います。廊下も広くできていて、車いすどうしが横に並んで通り過ぎることができます。それに、2階建てなので、スタッフがどこにいるのかがわかりやすいのはいいですね。4階5階となると、スタッフの動きが見えなくなってしまうんです。ご入居の方が出てこられたときにも、スタッフはすぐに気付くことができます。天窓があって、部屋の窓も広いので、施設の中が均等に明るい感じがします。最初からホームとして建てたので、バリアフリーのところもいいですね。」

ホーム長が感じる働きやすさは、他のスタッフも同様に感じているようです。

「スタッフも働きやすいと言っていますよね。ここに来る前に大きな施設にいたスタッフも結構いますので、2階建てだとスタッフ同士のコミュニケーションがとりやすいと言っていますね。施設施設していない感じで、いつでもご入居の方に寄り添えるというのは、すごく働きやすいし、自分がこうだったらいいのになぁ、とイメージしていた空間に近いという話は聞きます。」

ホーム全体を見渡すポジションにいる永原さんは、デコレーションにも気を配っています。

表側からは木造建築とは思えないスクエアな作りになっているが、中に入るとそこかしこに木のもつ柔らかさを感じることができる。中庭には、以前建っていた別荘の木を何本か移植。元の自然との馴染み具合は、木造ならでは。



室内は、どこも木の風合いを活かしたデザインになっている。ご家族とのくつろぎのスペースであるティールームやファミリールームは、気軽に入れて長居したくなる雰囲気に包まれている。

「玄関のところには、季節の生花を置いているんですが、生花を置くとご入居の方やご家族の方がすごく喜ばれます。生花も丁寧にお手入れしているわね、とご家族の方からも言われます。木造だから生花が合うという部分もあると思います。」

ホーム長として特に気に入っている点は、スペースの多さだそうです。

「3つのティールームやファミリールームがあります。自然と調和しながらくつろげるスペースがあるというところですね。お部屋の中でご家族の方とお話しされることもありますが、だいたいティールームに出て、お話しされている姿をよく見かけますね。本当にお好きなように共有スペースは使っていただけているのかなと。」

開設後1年が経過したところで、木造の意外なメリットも感じはじめていると言います。

「まず、鉄筋に比べて湿気が少ないように思いました。それから、お客様が転倒しても骨折したことがないんです。鉄筋のときは、結構、転倒して骨折はあったのですが、ここではまだゼロです。」住み心地においても、安全面においても木造の優位性を実感した永原さんですが、お客様からも評価する声が多く上がっています。

「江の島にあった施設が老朽化したので、10名引っ越してきたんです。こちらは広いし明るいと、引っ越してきて喜んでいる方も多いです。」

このままの状態を保っていくこと。永原さんはそれを目指しています。

■池田 恵さん（スタッフ）

ご家族の方が面会に来る回数も増えました。

一目見ただけで、その笑顔がお客様の安らぎになっているだろうとすぐに想像できる5年目の若手スタッフである池田さんは、永原さんのお話にも出てきた、江の島からの引っ越しとともにこの施設に移ってきました。

「以前いたところは、お客様はワンフロア3人なんですが、階数があったので、ひとつの階に必ずスタッフがひとりいることができないこともあって、見守りが難しかったですね。でも、ここでは、2階建てですからフロアごとに人がいるのでこちらとしても安心できます。」

特に、池田さんがグランダ鵠沼松が岡で強く感じたのは、明るさだと言います。

「前の施設に比べて、明るさは全然違いますね。日当たりがいいというか。明るいと気分的に働きやすくなりますし、入居者さんたちもその違いは感じておられると思います。ご家族の方が面会に来る回数も増えました。」

前の施設では夜勤が怖かったと言う池田さんですが「こっちではそれがないですね」と笑顔。スタッフ自身も安心を手に入れて、これからもバリバリ活躍してくれそうです。

COLUMN 木造の良さを確認しました。

株式会社 ベネッセスタイル ケア
スペースデザイン部 部長 米須 正明さん

私の部署は、建物の全般を扱う部門で、企画・管理・メインテナンスも全部やっています。施設を木造で作ってみようという計画は、5年くらい前からカナダ林産業審議会の方々と検討していました。木造のツーバイフォーで、技術的に防火地域で耐火建築が建てられるようになったんです。うちの老人ホームでも、木造にすることでのコストメリットだとか、工期が短縮できるとか、そういったところを一緒に研究していまして、5年くらい前にモデルプランを作って、コストも弾いたりして、どこかでそれを実現させるチャンスをと考えていました。大規模建築の中で、木造の良さ、温かみとかがあるんじゃないかと考えたわけです。そこで、今回、この物件が出てきて、この場所は、準防火地域なので、木造でも全然問題がなかったんです。で、やってみようと。

もともと、木造でやるならせいぜい2階建てだと思っていたんです。私たちの事業というのは、9割方テナント。われわれが発注主ではなくて。オーナーに建ててもらって借りるという形なので、こちらから積極的にこれでやらせてくれというのはなかなか難しい部分はあります。ですが、われわれの木造建築に対する思いに共感してくれるオーナーがいて、いろいろな条件の中で木造がいいねということであれば、木造を推奨していきたいとは思います。今回、身をもって木造の良さを確認できたのですからね。

開設して1年が経過したことで、断熱性能だとか、木造の良さを示す実証的なデータを集めてみるつもりです。エコで温暖化対策という大きな話の中ではありますが、木材を積極的に使うことで、逆に、山林をきちんと育成するというようなことがありますよね。もっと身近なところで、エンドユーザーが居心地よく暮らせるかというところの実証的なデータがほしいですね。そういう意味では、永原さんが言っていた、転倒しても骨折ゼロという話は大きいと思います。

ここまでの1年間は、いい感じできています。ほぼイメージしたように展開しています。

有料老人ホーム メディカルホーム グランダ鵠沼松が岡 DATA

- 有料老人ホーム（定員58名）
- 建築場所／神奈川県藤沢市鵠沼松が岡1-16-17
- 敷地面積／2908.01m² ■建築面積／2242.33m²
- 延床面積／2242.33m²
  （1階／1088.87m²、2階／1088.56m²、地階／64.90m²）
- 構造／1・2階 枠組壁工法（木造準耐火構造）、地階RC造
- 建築主／日本土地建物（株） ■設計監理／日土地綜合設計（株）
- 施工会社／（株）ヤマムラ
- 設計期間／2007年3月～2008年7月
- 施工期間／2008年7月～2009年2月

安心感が ひとつの家族のように結びつける

日本有数の温泉保養地、大分県別府市。海と山が近く、昔ながらの路地や家並みも
たくさん残されているこの街の住宅街に『はるかぜ』は立地しています。
一つの敷地に3棟ある施設の中で、左右シンメトリーで日本的な縦の格子をあしらったウッディな外観。
『はるかぜ』の介護サービスの中で、ナーシングホーム（介護老人ホーム）として
ユニットケアを行なっているこの建物は、2009年に新たにツーバイフォー工法によって建てられました。
50床を擁し、癒しへの数々の工夫が施されたこの木の家で、
介護をめぐるドラマはどのように進展しているのでしょう。皆さんの“ 五感の体験 ”をお聞きしました。

ほぼ毎日4〜5時間一緒に過ごす奥様も、RCと木造の違いを実感されている。特にエアコンを補足的にしか使わなくていい“夏涼しく、冬暖かい”想像以上の効果に感心。

■Yさん（ご主人とご主人のお母さまのお2人が入居）

元気はつらつ！

はるかぜを数年前から利用されているYさんは、新しいユニットケア棟が木造ツーバイフォーで建てられていく、その建築現場を何度か垣間見ていました。

「木材がたくさん運び込まれてきていて、素人目からは“本当にこれで介護施設が建つの？”という印象でしたね。あれ、ツーバイフォーの材料なんですよね。それをはめこんで造っていって。普通の木造とはちがうその作り方にもおどろきましたが、できあがって中を見て感心してしまいました。“こんなに和風にできたんだ”ってね（笑）。第一印象から居室はまるで我が家のようで、違和感はまったくなく主人も私もすぐ気に入りました。」

入居されてからご主人の様子に何かいい変化があったかお聞きしてみました。どんな小さな変化でも…と言葉を添える必要もなく、奥様は迷わず一つのうれしい事実をおしえてくれました。

「鉄筋の棟にいた頃は、主人はじっとしていることができなくて、ちょっと目を離すとガサガサと落ち着かないようで、別の部屋に入居しているお母さんの部屋に行っちゃったりで、私も気が気じゃなかったの。それが今では自分の部屋か食堂でゆっくり落ち着いて過ごすようになったんですよ。お母さんも一緒にユニット新館に移ったのですが、もう一人で行っちゃうようなことはなくなりましたよ。ほんと、私も主人も落ち着けてよかったと満足してるんです。」

傍らでにこにこ聞いていらっしゃるご主人。奥様の話にうなずきながら、ここでの生活のここちよさを自分も早く伝えたいとばかりにウズウズしてるご様子。そして決めの一言が飛び出しました。

「やっぱり木で造られてると、家とおんなじで落ち着くヨ。気持ちも若返るぞ！」

顔を見合わせて笑い合うお二人。さらに奥様はこう付け加えてくださいました。

「そう、この建物に移ってからは、お見舞いに来てくれた人がみんな『これ以上してあげられる孝行は他にないんじゃない』と言ってくれるんです。何年も介護する身としては、そういうふうに言ってもらえると本当にうれしいものですよ。」

センター部分から、向かって左側の居室に続く廊下を見通す。施設の前の道幅はわずか4メートルであったが、ツーバイフォー材は別の作業場でパネル化してトラックで運び込んだ。

小屋裏部屋を確保できるのは、ツーバイフォーの構造的な特徴の一つ。備品の収納スペースをここに集約することができる。“2階建プラス小屋裏部屋”の3階建てがコスト的に最も経済的であると設計の段階で判断した。

転倒時の安全性が異口同音に語られる木の床の効果だが、経年によりどんな手入れが必要になってくるのかが課題となる。 今のところ普通の掃除以外にメンテナンス的なことはしていない。

■Nさん（お父さまが入居されて10年）

ここはたしかに木のぬくもりを感じる。うん、落ち着く。

車いす生活が6年になるお父様。転倒の回数がだんだん増えてきたことが気がかりで、Nさんは89歳になられるお父様をこの木造の施設に移されました。

「以前にいたところも個室でしたが、これ以上足が悪くなってもよそに移らなくてもいいようにと、こちらの施設を希望しました。木の床であれば転倒しても骨折の危険性は低いという説明は受けていましたが、実際に入居前に館内を見てみてびっくりしてしまいました。居室は自宅のように家庭的ですし、それ以外のすべての場所がホームのイメージからはかけ離れた、高級な宿泊施設みたいだったんですから。」

ふだんはあまりしゃべらないというお父様も、この建物の感覚については静かな口調でおしえてくださいます。

「前の部屋は夜、鉄筋が冷えるんよ。ここはたしかに木のぬくもりを感じる。うん、落ち着く。」

2010年の4月にこちらに入居されて2カ月。前の鉄筋の部屋では6月になるとクーラーをつけていたのに、今は風通しがよく涼しいので、つける必要がないと満足そうにお二人は微笑みます。しかし、移ってきたばかりでまだ話し相手がいなくて、ちょっと寂しいとお父様の本音もすこし。

「だから今はもっぱら部屋でテレビばっかりでな。スポーツとか。自分の部屋みたいだから、テレビの見ごこちはいいけど。」

■古閑 美子さん（ケアスタッフ）

家族の方と家で一緒に介護してる感覚です。

「フツウの家が建つのかな?」……建築中の様子を見ていた古閑さんは、個室がどんなふうになるのか楽しみでした。

「私は育ってきた家も学校もみんな鉄筋の建物で、木造の体験なんておばあちゃん家くらいなんです。その思い出からすると、木の家は広くて、窓を開けると風が入ってきて涼しくて、寝っころがってごろごろできて…というイメージ。実際にこの木造が新しい職場になってまず感じたことは、やっぱりおばあちゃん家と同じで風がよく流れて、それで何よりうれしいのは、施設臭さが飛んでいってくれてることなんです。」

この仕事に就いて9年近くになる古閑さんですが、施設ならではの臭いが気になるのは今も変わりません。以前はお香を焚いていたこともありました。

「臭いがなくなったら気持ち的にせかせかしなくなり、前よりゆったりしたペースで仕事ができるようになった…かな（笑）。集団からユニットケアに変わって担当する

「木の建物は、部屋や共用スペースに季節の風物詩を飾りたくなる気持ちにさせる。」と古閑さん。

人数が少なくなったせいもあるけど、たしかに以前より一人ひとりとゆっくり向き合って対応するようになったと思います。それにつれて家族の方々とコミュニケーションをとる機会も増えて、なんか、“ 家で一緒に介護してる ”という感覚になっています。」

最後に古閑さん自身の身体の疲れも軽くなったと加えてくださいました。

シンメトリーのセンター部分に設置されたカナダ製 “ ペレットストーブ ”。灯油ではなく、二酸化炭素排出量の少ないバイオマスのチップ（木くず、廃材、さとうきびのしぼりかす、などから製造。使用後の灰は肥料に使える）を燃料に用いる。エコロジーの面で歓迎されるだけでなく、熱伝導率にも優れ、これ一台でワンフロア全体に暖かさが行き届くセントラルヒーティング的な役割を果たしている。木造に合わせた各設備の選択も重要になってくるという一例。

COLUMN　湯布院にある古い旅館の、癒しの力にあやかって。

社会福祉法人　洗心会　総合ケアセンター　はるかぜ
理事長　施設長　矢野 昌弘さん

“ わが家にいる感覚に施設を近付けたい ” という思いはずっと前からありました。私事ですが、30数年前に自宅を建て替えたとき、いくつかある工法を私なりに勉強しましてね。それで在来工法とはちがうツーバイフォーが、木造でありながら耐震・耐久に優れていて寸法に狂いがなく、しかもコストが安いとわかって。経済的で性能がいい…結果、自宅はツーバイフォーにしたんですね。そんな自分自身の経験もあり、50床のユニットケア特養ホーム『ナーシングホームはるかぜ』の新築に3階建てツーバイフォーを採用するにあたっては、未知数の不安より “ こんなメリットを実現できるにちがいない ” という期待感の方が強くありました。

介護施設では前例がないゆえ、慎重になったのはやはりコスト面。夏涼しく冬暖かいという木造の基本的な特性は理解・体験した上ですから、ランニングコストはあまり気にしてませんでしたが、果たしてイニシャルコストがどのくらいかかるのかと。しかし、設計士と施工会社の技術と創意工夫によって、結果として1床あたりにかかるイニシャルコストを “ 2割削減 ” することに成功しました。交付金制度になった現在、一般的にRC工法であれば1床1100万円強とされるところを、ツーバイフォーで約800万で実現することができたのです。

ランニングコストについてはまだ最初の1年の経過ですが、光熱費に関しては期待どおりの数値が出ました。50キロワット／住宅17戸分のソーラーシステムと館内全灯のLED化、各階中央にバイオマス燃料によるカナダ製のペレットストーブを配備したことなど、設備面からの効果もありますが、光熱費は単位面積あたりのRC工法の施設と比較して約1／3に。大幅なコストダウンとなりました。もちろん、窓を開ければ風通しがとても良く、閉めれば気密性が高いというツーバイフォーならではの構造特性のおかげで、エアコンの使用頻度が低いというのが大きな要因なのですが。

外観のデザインは、湯布院にある古い有名な旅館のたたずまいをモチーフにしました。趣きがあって静かで、という。現在、入居者の方々の半数は認知症なのですが面会数が増えています。個室の雰囲気が落ち着けて、ゆっくり会話ができるからでしょう。単に木造にしたという以上に、精神的に作用する “ 空気感 ” “ 安心感 ” そしてここで過ごす人みんなにとっての “ 優しさ ” までも設計していただきました。……設計士の方をはじめ、建築にたずさわっていただいた方々の介護への深い理解と知識、そして “ 独創的・革新的な介護施設を建てる ” ことに賭けた情熱に、本当に敬服し感謝しています。

■板井 奈央さん（ケアスタッフ）

鉄筋だったら おそらく骨折してた…

建物の第一印象を“ 旅館みたい ”に思ったと板井さん。彼女自身がこれまで鉄筋コンクリートの建物で暮らした経験がほとんどなく、人の居住空間は木造が基本、という感覚をおもちです。

「やはり高齢者施設もだんぜん木造がいいと私は思いますよ。まず第一にいざ転倒したときのケガを最小限に軽減させてくれますから。私がはるかぜに勤務してからのこの3カ月間に、鉄筋だったらおそらく骨折していたにちがいない転倒事例がありました。

ところが、この建物の床ではあざだけで済んだんです。打ち身にもならなくてちょっと驚きでした。木って、“ 柔らかい ”イメージ以上に素材として“ 軟らかい ”んですね。それに夏は涼しく、冬は暖かく、エアコンに頼らなくていいんです。やっぱり木は落ち着きます。」

転倒が大事に至らなくて本当によかった、と板井さん。ホームが家庭のような環境になった分、自分も家族のようにかゆいところに手がとどくケアをしていきたいと締めくくりました。

COLUMN “和”が“輪”につながる…実に体感できますね、本当に。

社会福祉法人 洗心会 総合ケアセンター はるかぜ
ナーシングホーム施設長 帆足 道応さん

実は私の叔父が材木商をやっていることもあって、個人的にも木は呼吸をする生きている素材で温度や湿度を調節してくれ、高齢者にはやさしく最適だとは思っていたんです。2004年に耐火基準に公的な認可が下りて（※参照 5ページ）、木造のデメリットとされてきた耐火や耐熱、耐震についての懸念がクリアできたから『今度の増築は木造にしよう!』と踏み切れたんですね。現実のものとなって本当によかったです。開所してまる1年。私がまず気づいたのは、家族の方々が面会に来られる回数が増え、滞在時間が長くなったということなんです。以前は面会に来なかった方々もお見えになるようになりました。

つまり、家族と入居者、そして職員の間のコミュニケーションが以前にも増して密になったということです。これは間違いなく木のやさしい空気感による効用でしょう。RCの建物に比べ、このはるかぜにはいい意味で生活感が満ちています。……声や音の響き方、吹き抜ける風……すべてにぬくもりがあるんです。職員がまず影響を受けていると思いますよ。仕事ぶりが変わってきた。ご家族の意見を前にもまして素直に聞き入れるようになってきたと思うし、ベテランと若手のスタッフ間の関わり方にしても、隔たりがなくなった感じがします。

『あの人（入居者）の趣味のネタを仕入れたから、ゆっくり話しをしてみよう』とか、『今日はあの人の家族が来るから○○する用意をしておこう』とか、気持ちに余裕ができて、能動的な対応が目立つようになりましたね。

介護施設というのは、やっぱり働く人が明るくて自然と笑顔が生まれるような環境じゃないといけません。認知症の方でも相手の表情はちゃんと読み取りますからね。

ご覧の通りはるかぜは内装とインテリアを和のテイストでまとめています。構造だけでなく見た目にも木目や珪藻土をあしらい、落ち着きや和みが感じられるようにしています。これも心理面にはたらきかけてきますね。

昔から木をうまく使い自然の力を採り入れてきた日本人のセンス・技というのは本当にスゴいと思います。実際に“ 和 ”を感じさせる空間ほど人の“ 輪 ”ができているのですから、五感で感じるということは明らかにありますね。私もはるかぜで過ごしていてあらためて気づかされました。

各居室には“ 色 ”にテーマをもたせ、ユニットごとに「ここがわが家」とわかる造りが図られている。カーテンの色も設計段階からコーディネイト。視覚にうったえる演出がすみずみに凝らされている。

■池田 妙子さん（ケアスタッフ）

あ、陽ざしの反射かしら！

「ここで働いて何気なく1年過ぎたけど、仕事からくる足腰の痛みは感じなくなりましたね。以前の鉄筋の建物のときはいつも足が疲れるから、いちばんはきやすい自分のシューズでやっていたんですが、今では普通のナースシューズでも疲れません。

夜勤のときは素足で歩くこともありますが、床がクッションになっているのがあらためてわかりますね。」

“ 木造建築物 ”と聞いて池田さんがまず連想するのは、太い柱のあるような“ 古い民家 ”なのだそうです。

「でもここの施設は柱や梁じゃなく、面を組み合わせて積み重ねて造られているんですよね？　柔らかいんだけど面で囲まれてガッチリしてる感じを受けとめてます。あと鉄筋とちがうのは…あ、陽ざしの反射かしら！

建物の外も中も“ 陽の光が反射した光 ”の感じが、なんだかやさしくて温かみがあるんです。」

光の反射の微妙なちがいを感じる池田さんの繊細な感性、脱帽です。木が光におよぼす作用……人の五感の他に機械などで証明できるものなのでしょうか。

社会福祉法人 洗心会 総合ケアセンター ナーシングホーム はるかぜ　DATA

- 特別養護老人ホーム（定員50名）
- 建築場所／大分県別府市鶴見町8組の5
- 敷地面積／1728.00m²（523.63坪）
- 建築面積／664.4m²
- 延床面積／2094.57m²（1・2・3階各／649.54m²、4階／145.93m²）
- 構造／A・C棟(両端/枠組壁工法（木造耐火構造）、B棟（中央部）・3階・ロフト／RC造
- 設計監理／（有）吉高綜合設計コンサルタント
- 施工会社／森田建設（株）
- 設計期間／2008年4月～2008年8月
- 施工期間／2008年10月～2009年5月

木のやさしさを誰もが感じ取れる…そんな空間を創造していきたい

有限会社　吉高綜合設計コンサルタント
代表取締役　1級建築士
吉高 久人氏

高齢化社会の到来が明らかでありながら、日本の高齢者施設に関する設計ノウハウは諸外国に比べ、たち遅れたまま今日まで来てしまいました。これまでの高齢者施設は、どうして病院や療養施設の延長のような画一的な冷たい鉄筋コンクリートの建物ばかりなのか？　それは日本の建設業界全体に脈々と続いてきた問題でもあります。1970年代のベビーブーマー、いわゆる団地族の爆発的な拡大を受け、鉄筋コンクリートの方が木造に比べ耐火・耐熱・耐震・耐久性で数値的に勝るという当時の一元的な理由。以来、ほぼ当時の価値基準にとらわれたまま、集合住宅や公共施設の建設といえば、RC工法一辺倒の発想になっていってしまったのです。そこから派生して「木造の方が高くつく」という根拠のない誤った認識も生んでしまいました。もともと木を使うことがうまい日本の建築文化は衰退の一途にあると言わざるをえません。

私はこうした現状を危惧し、木造設計の新しい可能性を追求しながら数々の物件の設計を手がけてきました。しかし、2004年にカナダ林産業審議会（COFI）と日本ツーバイフォー建築協会が共同でツーバイフォー工法について耐火構造の認定を取得できたことが象徴するように（※参照 5ページ）、ここへきてようやく木造建築の優れた特性……耐火性、耐熱性、耐震性について木造はRC造に何ら劣る物ではない……という再認識・再評価がされつつあります。「地球温暖化／環境問題」という国際社会の要請からもこれからはRC工法から木造建築にシフトするべきと考えられています。資源調達や加工、輸送など、竣工までに費やされるすべてのエネルギー消費を換算すると、木造のCO2排出量はRC造の実に1／2以下なのです。もちろん「人にやさしい」という介護の大命題についても、音・光・空気・香り・感触など、五感を通じて心身にはたらきかけてくる癒しの作用には計り知れないものがある。この冊子で皆さんが証言してくださっている通りです。

今回、建築業界・福祉業界の両方にとってほとんど前例のなかったツーバイフォーによる『明治清流苑』と『はるかぜ』の設計は、私にとっても大きなチャレンジでした。木造の特性を生かし、入居者と介護する側の視点でどこまでやさしくできるのか、設計図通りいかに建てるか、コストと納期管理…など、試行錯誤を極めました。私一人の知識では限界があり、構造設計は東京で、フレーミングは福岡で、構造ソフトは北海道でと、およそ全国を巻き込んだ一大プロジェクトとなりました。その甲斐あって、予想していた以上に皆様に高い評価をいただき、これからの介護施設の一つの理想型を提示できたと思っています。現場には私専用の車椅子があり、利用者の目線からつねに改良点はないかと研究を重ねています。また、耐火認定の内容に関しても、私たち現場から課題・問題点を専門機関に上げ、いっそうの改善を働きかけていきます。

特養施設で利用者の満足度を高めるために、ますます居住性と安全性が重視される

独立行政法人　福祉医療機構（WAM）
福祉貸付部長　中井 孝之氏

介護保険法が施行された2000年以降、民間事業者の福祉サービスへの参入が拡大するのと同時に、利用者と事業者との間は“ 契約関係 ”になり施設の運営側には経営に対する責任が求められることになったわけです。私たち独立行政法人福祉医療機構（WAM）は、福祉・医療に関係する民間活動の長期的な安定経営・運営を、主に『政策融資』『情報提供』『経営指導』等の様々な面からサポートしています。

主な融資先は、社会福祉法人や医療法人等となっていますが、各種のサービスが提供されている中、私たちが最近特に注目しているのは“ 特別養護老人ホーム ”です。融資の8割を占める特別養護老人ホームで収支がうまくとれるかどうかが大変気になるところです。私はこれからの介護施設の運営には、“ 利用者はどんな生活を送りたいのか ”かつ“ その上で効率化をはかる運営手段は何か ”について、

最新の情報収集が必要不可欠だと感じます。例えば、利用者が施設に対して満足を感じるかどうかのポイントの1つとしては“ 食事 ”だと思います。日課の時間に沿って画一的に提供する給食ではなく、温かい食事を利用者の状態に合わせてゆったりと幅をもってその人のリズムで食べることができるシステムはどうしたら良いか。利用者のニーズに合わせた調理、働く人にとっても快適な調理環境、提供コストをダウンできる器具など、具体的な食事提供システムとしての設備面・設計面での話になってくるわけですが、なかなかそこまでお考えになられている運営者は多くないのが現状です。

現在、全国の介護施設で90万床弱とされるベッド数を2023年までにさらに16万床整備するよう国において目標が示されていますし、すでにある90万床のうち、築30年以上の建て替え期を迎えた物件と合わせると、相当数の施設整備が必要と思われます。最近登場した、新たな可能性をもった“ 木造耐火施設 ”という選択肢。減価償却がRC造の39年に比べ、木造は17年と短く、まず資金運用上有利でありながら、建物はそれ以上の年月にわたる耐久性を実現できると期待されています。また入居者をはじめとする皆さんの体験談にあったように、骨折などのリスクが低い安全性や精神的な落ち着きがもてる家庭の延長線上の居住性など、木造ならではの人にやさしい親和性の高さもうかがってっています。

私たちWAMは、まず整備に要する資金を長期・低利・固定でお貸しすることを前提に、地域ごとの特性の調査・分析も含めて『地域の特性に対応した施設の姿』をご提案しています。つねに最新の整備状況、経営ノウハウが集まっている私たちに、まずはご相談ください。

資金融資その他についての詳細は
ホームページまで・・・
http://www.wam.go.jp/wam/index.html

木造施設はいわば漢方薬。入居者、職員にじわっと確実に効いてきます

株式会社 日本経営
戦略人事コンサルティング
取締役 堀田 慎一氏

介護に関係するマーケットは、この30年間で6倍の市場拡大をしていますが、すべての産業に当てはまる成長～成熟～衰退のサイクルについて、介護ビジネスも例外ではありません。介護ビジネスの中でも特別養護老人ホームをはじめとする施設経営の分野は、現在成熟期の段階といえると思います。さらに成熟度の段階としてとらえてみると……施設を作れば入居者がいらっしゃる“ 生産者指向 ”～いかにPRするか方法を考える“ 販売者指向 ”～利用者が何を求めているかを考える“ マーケティング指向 ”～利用者の要望をいちばんに優先する“ 消費者指向 ”～そのサービスが社会にとってどれくらい大事かの視点で考える“ 社会指向 ”……というステップから考えると、介護ビジネスは“ 消費者指向 ”から“ 社会指向 ”に向かうフェーズにあると見られます。つまり、サービスの要素一つひとつに修練をつんで介護の質を上げていかなければ、この先、利用者および地域社会から選別されてしまうということです。

私は専門として主に人材マネジメントの面から、経営ノウハウをお伝えしています。介護施設の運営は人材のモチベーションを高め一定の質の担保をはかっていくことがきわめて重要です。働く人たちのモチベーションを高めるためにも、木造の施設だけがもつ五感で感じるここちよさは大きなプラスになると私も思います。たくさんのRC造の施設を見てきた経験に照らし、私がまず木造の施設に感じるのは「光の反射がやさしい」ということです。建物の中と外、あらゆるところで感じます。そして、天井がRC造と同じ低さだとしても、RC造ほどに圧迫感がないのです。その他の効果についてはスタッフの方々の感想にある通りですが、木造は男性よりも特に女性にとってうれしい効果を発揮すると思われます。女性が2／3を占める介護の職場ですから、木造かRC造か建物の良し悪しはソフト、ひいてはハート面（職場の雰囲気、職員同士の人間関係、メンタルケアなど）のサービスの質にも影響を与えることでしょう。……総括するなら、これからの質の高いサービスとは、施設を自宅に近い“ 住まい ”に近づけてあげるということなのです。

COUNCIL OF FOREST INDUSTRIES
FORESTRY FOR THE PLANET.
FOREST PRODUCTS FOR THE WORLD.

カナダ林産業審議会 SPFグループ
〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-8-27 巴町アネックス2号館9階
TEL.03-5401-0533 FAX.03-5401-0538
http//www.cofi.or.jp

Canada Wood
カナダウッド
●カナダ木材製品全般の普及・促進

Forestry Innovation Investment
Forestry Innovation Investment（FII）
●BC州森林及び林産業の保護育成を目的とした組織

※このパンフレットは2010年6月に取材した内容をまとめたものです。収録されている情報の一切には、正確を期すために細心の注意が払われていますが、
カナダ林産業審議会およびその役員、被用者、代理人は、本パンフレット中のいかなる誤謬、欠陥あるいはこれに基づく設計ないし仕事上の不都合に対して、いかなる責任も負うものではありません。